会報
16号

れきふう

函館の歴史的風土を守の会会報
No.16　S59.2.28発行
発行所　函館の歴史的風土を守る会
印刷所　双葉印刷所
電話（0138）53－7730

知識人の役割と市民運動

第6回函館の町並みを美しくする
新春チャリティパーティ実行委員長　木下順一

曽て知識人は象牙の塔に籠って自分の専門のみを研究し、その成果を発表すればこと足りた。そしてそれはどこかストイックで、予言的で、知識人の態度として尊敬された。

いや尊敬どころか、じつはここに見えざる手が働いて権力者に有利に、都合いいように貢献してきた。この権力者というのは、権力の場にいる者のみをささない。やがては権力を握ぎる層をも含めていっているので、右が権力を握ぎっていると、左は握ぎっていないことになるが、しかし左はやがて権力を握ぎる層で、権力の予備軍で、彼らも又権力者である。

１９世紀の知識人は、そしてそれは２０世紀にも続いているのだが、右といわず、左といわず、10年、20年と先のことを予言してきたために、好むと好まざるとに拘らず、権力者に有利な役割を果してきた。その結果どうなったかというと、開発が進み、大衆は繁栄と廃墟の背中合わせに生きることを強いられた。

なぜそうなったかと言うと、それは進歩を信じたからで一つは知識人の罪であり、もう一つは誰もが暗黙のうちに先へいけばよくなるという希望を持っているからだ。先へいけば老いて死ぬように、よくなる筈はない。それに進歩というまやかしを洗い直す必要があるのに、今までの知識人はそういうことをしなかった。そればかりか、知識人は合理主義をよしとした。デカルトの、吾思う故に吾有りという主体によるところの合理主義を金科玉条として、知識人は一度もその主体を疑わなかった。

そこで、政治家も経済人も、開発という主体を根城に、政策を展開し、金を投じた。その結果地球上に繁栄と廃墟が同居し、しかも廃墟の方は、ものすごい勢いでひろがろうとしている。アフリカの旱魃や難民は指導者がいないからでも、偶然でもない。主体を疑わぬ文明国の開発の結果である。

しかしフロイトだけはその主体を疑っていた。デカルト流のいろんな外界、対象を疑っている主体とは何か。この主体はそんなにはっきりしているものなのか。フロイトは主体を疑っているうちに、人間の意識とは、無意識の一部分で、しかも無意識の爆発した過剰にすぎぬと判った。ヒステリィー患者を扱っているうちに、そういうことが判ったのだ。主体が疑わしいのだから主観は曖昧で、まして客観なぞないに等しい。

知識人とは１０年２０年先の、見えないものを見えるようにすることではない。そんな権力者に手をかすことではなく、今何が必要かを指摘して、分析することだ。在るけれども、見えていないものを、視点を変えて、見えるようにすることだ。

その魁けが住民運動、市民運動であった。反戦・反核・自然保護・町並保存の運動だ。彼らは、直観と情緒で、今何が必要か判っているのである。それは地方性であり、特殊性であり、それらを守ることで、地球のバランスがたもたれることを彼らは嗅覚的に判っているのである。

これからの知識人の役割はこの魁けを、分析して、判りゃすぐ提供することである。あくまでもいかなる権力にも、権力の予備軍にも手をかさぬ方法でもある。

（歴風文化賞受賞）
相馬株式会社　大正５年　設計・施工　筒井与三郎

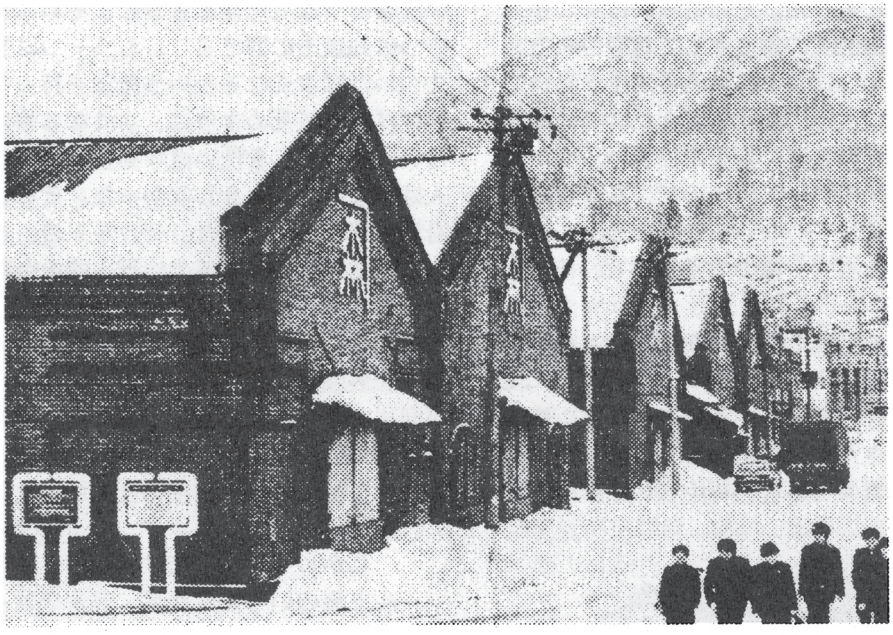
昭和59年(1984年)1月9日(月曜日)
北海道新聞(夕刊)

「歴風文化賞」を設立

函館の歴史的風土を守る会

町並み保存の貢献者、団体に

函館の歴史的風土を守る会（略称・歴風会、今田光夫会長）は今年から歴史的景観や町並み保存に努力している団体、個人などを表彰することにした。そして第一回は①七財橋から見た金森倉庫の景観②洋館社屋を保存する相馬株式会社③函館山の緑を守る運動を続ける南北海道自然保護協会―とした。二十五日函館国際ホテルで開催する同会主催の「第六回函館の町並みを美しくする新春チャリティー・パーティー」の中で「歴風文化賞」の名で発表する。



歴史的風土を守る会が函館の「原風景」とした金森倉庫の景観

まず金森倉庫と2団体

歴風文化賞を設けたのは、明治・大正期の歴史的景観を比較的良く残している函館西部地区の町並みも、だまっていれば破壊が進んでいくとして、市民の立場から町並みの保存的再生の機運を高めていくのがねらい。

金森倉庫群の景観は、港町として発展してきた函館の原風景であり、映画やテレビのロケに最近よく使われている。相馬の社屋は大正五年（一九一六年）の木造建築で、函館の洋風建築の代表例の一つ。昨年大補修した。函館山の緑は、西部地区の町並みを引き立たせる背後の景観として欠かせないものであり、その自然を十年余り前から守る運動を進めてきたのが、南北海道自然保護協会だ。

歴風会は今後、毎年一回、新春チャリティー・パーティーの席で三、四件の歴風文化賞を発表していくことにしている。

チャリティー・パーティーは今年で六回目。歴風会は町並み基金を設立、益金の中から昨年までに六十万円を積み立てている。イギリスのナショナル・トラスト運動にヒントを得たもので、当面は一千万円が目標。将来は歴史的建物の買い取り、補修などに使う予定。

パーティーでは抽選会やバンド演奏、歴史的町並みを撮った美しいスライド上映などの楽しい催しがいっぱい。歴風会では、抽選会の景品の提供協力を広く市民に求めている。

パーティーは午後六時半から。会費四千五百円。連絡先は五稜郭タワー（電(51)4785）、田尻方（電(57)2200）

第6回函館の町並みを美しくする新春チャリティパーティ

実行委員長　木下順一氏
司会　NHK　品田公明アナウンサー
　　HBC　吉田真弓アナウンサー
　　バンド　オールスターズ
スライド上映　建築雑考の会　永田氏他
チャリティ益金使途　町並み基金の設立

チャリティパーテーアラカルト

歴風文化賞

相馬株式会社　殿

貴社の建物は函館市大町九ー一に大正五年に建てられ　函館の洋風建築の伝統と格式を今日に伝えるすぐれた歴史的建造物であります。

貴社は長年にわたりその維持、保全に尽され函館西部地区の町並みにうるおいを与えております。そのご努力に謹んで感謝の意を表します

南北海道自然保護協会　殿

歴史的町並みを良く残している函館西部は函館山のふもとにあります　教会も公会堂も寺院、商家、町家もその全てが背景に構える函館山の緑によって引き立っているといえます。函館山なくして函館の歴史的町並みは語れません。その函館山の自然を長年にわたり守る活動を精力的に続けてきた貴協会の努力に感謝と敬意を表します。

（はこだて歴史散歩より転載）

歴風文化賞宣言

七財橋から見た金森
金森倉庫群界わいの景観

函館港に面したその風景は、港町の詩情を残す函館の原風景であります　赤レンガと堀割の静かなたたずまい　かってそこははしけ荷役で活況を呈した函館発展の象徴でもあり　この地に住む者へ　勇気と愛着と誇りを感じさせてくれます　この景観が函館の原風景として永く護持せられることをこい願うものであります。こゝに歴風文化賞に値するものとして宣言します。

～～～～～パーティ会場からの声～～～～～

○町並み基金1,000万円キャンペーンのパーティだって、私達もいいことしたネ、デモサ、いろんなイベント考えなくちゃね…。1,000万円目標、シンドイベサ……。

○今回はご馳走タップリ、景品あまた、ヨカッタ!!　時価９万円の自転車２台もらった人　ついてんな……。

○ナンニも当らないし　お目あてのダンスタイムは抽選にとられちゃうし　ツマンナイ！　カゲの声……あーあー全員のご満足いただける企画むづかしいネ……。デモ努力します。

○空気みたいな町並みも　アングルいゝのか　町並みスライド見せるネ。企画としてもヨカッタヨ。

○会員外の参加者多数でうれしく淋しく復雑な気持　会員の皆さん来年は是非おでかけ下さい。
待ってます!!　（受付一同）

○第７回パーティのとり組みは年内に全部おえよう。実行委員は内外へ広く呼びかけ募ろう。（事務局のウラ声）

○うちの会社で新年会は賑やかに華やかにやろうと、相談の結果、歴風会のパーティ選んだんだ。　来年もこの線でゆくさ。ダンスの腕もみがいてな……。隣のテーブルは級会らしかったょ。

○若いの　年輩ご夫婦のカップル結構いらしてたわ。　家族お揃い組もたのしそう……。

原風景のこと

盛岡市・佐藤　優

（前盛岡市市民生活部長
現・在研究所長）

1. 行政主導か市民主導か

ご承知のように横浜市の街づくりは「行政主導型」だといわれる。盛岡市などから見れば大変うらやましいと思われる点も多々ある。企画力や実行力で市民をリードしていくことは大変なことである。財政力もさることながら、横浜市役所内に街づくりプランナーがいることであり、そのような人材は当然学者、研究者の活用のエキスパートでもある。住民のパワーというものは街づくりの実践段階で極めて大きい力を発揮するものだが、パワー即頭脳となり難い場合がある。例えば、横浜市の都市デザイン（総合的な街づくり）の場合など「横浜市都市デザイン基本調査報告書（昭和57年3月）」のなかに「都市デザインは、総合的判断と調整を行なう力をもった自治体が中心になって推進していかなければならない」と、はっきり自治体が中心となる必要性を述べている。

盛岡市は「市民主導型」といわれる。しかし、市民の間では「行政主導市民参加型」であるとの声が多い。前述の横浜市は企画調整局が、盛岡市は市民生活部が所管してるのだからニュアンスの違いが出てくるのは当然のことだろう。市民主導型といっても市民の要望、意見（総合的でないことが多い）をすべてハイ、ハイと聞けるわけではない。行政側としては当然プランを練り、およそこれでいけるという段階で市民の要望、意見が加味されるというケースが多い。市民生活部という性格上、事業の発想やプランが市民の意見であるとことも少くないし、「市民の声」というお墨つきが市役所内部の力関係を優位にできたことも事実である。

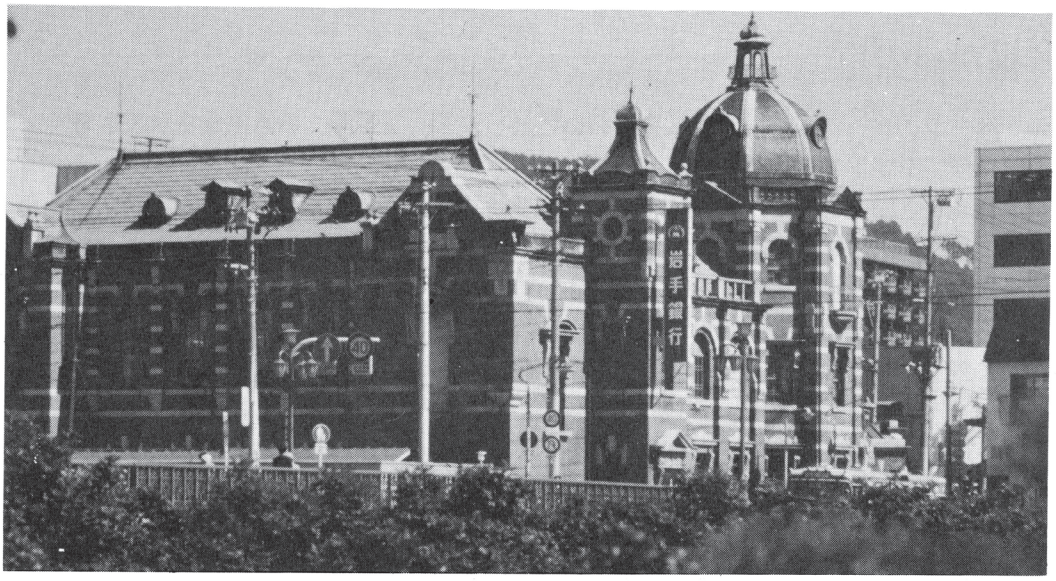
街づくりは人づくりだといわれる。しかし、人づくりは街や環境などと深く関わっているようにも思える。街づくりが先か、人づくりが先か、という実り少い議論はあるが、ひとつの実践活動の証しの前には、いかにも影の薄いものである。市民も行政もまずやって見る決断が必要で、流動の中からお互い何かを得、人が育って来たのではないかと考えてきたのである。

2. 街づくりのテーマ

街づくりに際しそれぞれの都市ではヴィジョンを持ち、テーマが設定されている。それは市民憲章であったり、市民運動の目標であったりはするが、やはりその都市のあるべき方向を定めた基本計画や総合計画が基軸になるべきものだろう。テーマが決まれば、市民活動のあり方、守るべきルールやマナーがおのずと生まれてくるだろう。テニスをやろうとしてるのに、野球のユニホームやスパイクシューズでコートに入られては皆が迷惑する。小学生の褌のように相撲をしようとしてるのか、水泳をしようとしてるのか（ちよっと時代が古いデスネ）はっきりしない服装では市民は大いに戸惑い、都市の政策としては大変困ることで、行政の責任が問われなければならない。

盛岡市においては、10数年来総論としては「自然と調和したうるおいのある街づくり」を標榜（ひようぼう）し、各論としては「自然環境の保全」「歴史的環境の保全」「環境のデザイン」など3つの柱になっている。これら3つの柱を横つなぎにしているのが「都市景観」である。

自然環境の保全については、自然保護は当然であるが百



◁岩手銀行本店
（旧盛岡銀行）

明治44年（1911）、辰野金吾、葛西萬司の設計により、事業費13万余円をかけて建設されたもの。
盛岡市指定保存建造物第1号で盛岡市の代表的近代建築であり、都市景観といえる。

◁中央病院前の
イチヨウの木

道路を川側に拡げるとき川端にあったイチョウの木が道路に残ったもの。県立中央病院の患者、医師などの陳情もあり昭和48年存置を決め、盛岡の代表的アイ・ストップといえる。

万本植樹運動、生け垣1万メートル運動などのように街の中に緑を増やすこと、保存樹木を指定し保護することなど、都市の風景づくりの意識も極めて強いといえる。歴史的環境の保全も、単に文化財保護のように資料保存的に指定するのではなく、街づくりに生かされなければならない。現に人が住み、職場として活用されていることが建物に光沢を与え、都市景観上からも、コミュニティの観点からも重要な意義を持つ。また、保存建造物を守るだけではなく、そのかいわいの街づくりに自らが主導権を握り、周囲の建物が保存建造物との調和に留意するレベルまで引き上げたいものである。盛岡市の保存建造物に指定されている「ござ九」の向いの南部鉄器屋さんが、ござ九を強く意識して江戸時代の建物に合いそうなたたずまいの店舗を作って評判になったし、同じく保存建造物「旧井彌商店」の向いの長屋風店舗が、黒と白の無彩色、二階建ての店舗に生まれ変わり、さらに保存建造物「東顕寺（とうけんじ）」前の共同店舗が門前風に建設されて、それぞれのかいわいに独特のムードをかもし出している。環境のデザインについても、昭和46年（1971）発足当初はバス停のくずかごなどおそるおそるという感じであったが、その後建物や橋のデザインなどかなり大胆になり、さらにアーバンデザインを手がけ現在まで28件に及んでいる。この環境のデザインも当然都市景観を考慮したもので、かいわいとの調和を重視していることはいうまでもない。

このような環境のデザインが建築士会を刺激し、市の主催する各種コンペやシンポジウムに積極的に参加するほか自らも「都市景観を考えるシンポジウムを開催するなど、建築サイドからの都市景観づくりに意欲をもやしている。「盛岡は建築にうるさい土地柄と聞いていましたが……」他県資本の関係者はボヤくが、ボヤキながらも市民を敵に廻すような愚かな建物はつくらない。市民を敵に廻して、商売がうまくいくとは誰も考えないからである。

3. 市民のために何をすべきか

街づくりの柱である自然環境の保全、歴史的環境の保全環境のデザインなどは変則的と思われるが市民生活部が所管してきた。一方においては、市の広報やコミュニティ活動も担当してきている。市民の活動を助長し、行政に活力を与えるセクションで市役所の顔といわれるゆえんである。しかし、市役所内部の調整は大変であった。自然環境の保全についていえば、経済林などを担当する農林課と意見が異なることもあり、歴史的建造物は現地保存などの関係から都市計画や消防防災の面からの指摘などがあり困難なことも多かった。環境デザインはほとんど建設部など事業課に多く、市民生活部は他部局の事業のために走り廻ってきたようなものである。しかし、横つなぎの太さが行政の文化度を示すものとすれば、苦労のしがいがあったものといえる。

都市景観事業は「原風景」づくりの一部であると思っている。原風景が教育にも、行政にもほとんど取り上げられないできたことは、原風景が幼少年にとっての精神的風土であることの意義を考えてみると、いても立ってもいられない気持だったのである。そのため、秩序と不秩序の間をさまよって来たようである。

さとう・まさる氏

大正11年、盛岡市生まれ。旧制盛岡高等工業（現岩手大学工学部）卒。教職の後、昭和30年盛岡市役所に入り、保健体育、社会教育、国体局総務、市民生活各課長の後、昭和50年から市民生活部長。昭和58年3月退職後、「在研究所」を創立し所長。著書「脈脈盛岡の街づくり」

（近刊予定）

新春座談会

場所　函館切花亭

亭主　万　俵

新年早々、函館の某所に仲間が集った時、文化の問題に話が及んだ。話題は豊富だったが、少々アルコールが入っていたせいもあり、採録は必ずしも正確ではない。

E：　選挙で全国的に注目された3区が、汚職議員の最高点当選で文化程度の低さをみせてしまったが。

C：　うたかたみたいなテクノに夢をかけるのも最不況都市脱皮のためだし、それで悪力にでもすがりたい気持ちだったのだろう。

A：　ところで、3年前の北洋資料館問題から、一般市民が文化とか、町並に関して発言が多くなったと思っているけど、最近蔵などを喫茶店等に改造することがはやっているね。

D：　なにしろ完成すればすぐにマスコミには取上げられるし。（笑い）

B：　町並保存が地域住民の犠牲の上になりたっているともいわれているので、残したい建物と共存するにはどうしたらいいかを考える、ひとつの例になっているね。

A：　しかし、まだ文化は行政になじまないという考えがあるんだろうな。

C：　まあ、文化は遊びともいえるし、なんとなく高級なものという誤解がある。けれど最近、かなり理解されてきたね。役所のほうは今一だがね。

S：　10月9日に、佐藤優氏（前盛岡市市民部長）の講演がユニオンスクェアーであったが。

B：　市民の心に揺さぶりをかけるような、あのようなお役人はわが函館にいるだろうかと、考えてしまったね。町並保存とか活用に錯誤を繰返しながらアイデアを出してゆく、住民と役所の一体感がすばらしいね。しかし、こういう講演会に市の職員はまず顔をださないな。

C：　以前に全国の100都市のランク付が発表され、函館は97位だからね。

E：　いや、いろいろ苦労している職員もいるよ。

A：　「盛岡市環境デザイン委員会」が市長の諮問機関で、市民21人と市の関係部長3名が都市景観を考えながらデザインするなんて味なことをしているね。……函館でもやれそうだが。

S：　そこは具体的にどんなことをするの。

A：　公園、公共の建造物等を作るときに町並を考えながら設計しようということらしい。一般の家屋も相談にのるという。外国では当り前の事だが。

E：　市民の方からどんどん注文を出すべきだろう。

E：　連絡船の問題はどうかね。

S：　市の方もやっと重い腰を上げたが、市民運動で取り上げた時からみれば大きな進歩といえる。3年もかかったけど。

C：　政治家のリップサービスでは残りそうだが、これからが大変だろう。函館だけの問題ではないので市の方でどれだけ力を入れるかだね。それと新造船のアイデアと活用法も考えねばならないだろう。

F：　活用法を考えることなどいらないさ。国家的に必要だから残すべきだというので、そのほうが経済的でもあるのは、はっきりしている。

A：　ある人が角栄が函館にいたら、存続するのは確かだといっていたが、おそらく誰も否定できないだろうね。なさけないことだが。

D：　テクノポリス指定と連絡船廃止とのどちらかの選択をせまられるという話もあるが。

B：　それはないだろう、複数の輸送路が絶対必要なのだからね。しかし、指定されたとしても500億円位地元負担が必要だし、政府の指定より企業が函館に来るかどうかなんでね。土地、電力、水の便等問題が多すぎるし、理工系の大学も必要だ。

E：　昭和58年も最後になって、ユニオンスクェアーの倒産というショッキングなニュースがあって、マスコミの取りあげかたが、「文化人商法の破綻」なんてあったけど。

C：　明治期には商人で文化人というべき人物もいたが、あの見出しは安直だね。

A：　O氏が虚業家の口車に乗せられたといえそうだが始める前に皆が忠告したけど聴かなかったな。文化運動と経済活動とは別物で、そこに甘えがあり、相手を信用しすぎたきらいがある。

B：　収支のバランスを初めから考えていないという驚くべきことも言われているが。

A：　どうもそのへんが分らないのだが、O氏は随分立派なことを言ってたが、自分たちが良い事をしているのだから資金も、なにも函館の人たちが応援しないのがおかしいといってるようだ。

C：　そんな無茶な思いあがりを彼に許して来たのは我々の責任でもあるだろうな。

A：　まあ、O氏がどれだけ責任を果すかだが零細な債権者を泣かすようなことはしないで欲しいね。

ただ結果的に、あの建物に寄ってたかって付加価値をつけて差上げたみたいだね。

E：　文化財の所有者にはそれくらい当然か。

想い出の第一頁

早稲田大学名誉教授
明　石　信　道

啄木の歌の中には自分の手をしみじみとみて貧乏を感じた歌がある。私も近頃は自分の手をみて、青年時代よりあかみの衰えに気がつく。年はとりたくない！と思ってもしようがない。

外国の町筋をみた。また日本の内地の町筋もみた。特に外国の町筋は函館に比較にならぬほど美しく整っていたし、内地の城下町などは歴史との関り合いのためか整然たるたたずまいをみせていた。しかし、それら町筋とか界隈に想出となるものはひとつもない。想出に充満してるのは私にとって函館よりほかには無いのだ。誰でも故郷の叙情詩は美に優ると同じように感じているだろう。　駅前開発ビルの設計と監理で昭和５４年から昭和５８年にわたり約４５ケ月ほど函館に滞留し、仕事の合間をみつけては、幼年時から小学校時代・中学校時代の想出を回想する時を楽しんだ。建物も変り、街路も変りながら、青柳町の公園界隈から蓬莱町・恵比寿町から元町、辨天・大町・山背泊・入舟町などは昔ながらの建物も残り、つきるところなく想出を語ってくれた。

私は満８２才になった。別にこれという用事もなく、毎日のように古日記の抄録をして楽んでいる。第三者からみれば、頗る退屈な、しかも平凡な記述にとれるだろうが、私にとっては単に１ケ年に区切っても波瀾があり苦渋と歓喜は曲折していて、危い橋を渡ったことも年に一度か二度あった。種々の家庭事情もあったが、青年時代から独立奔放の性格はあった。そのためか俸給に縛られて規則づくめで働くことは避けていた。たゞ小学校時代の末期頃から意識なしに、なんでも興味をもち、いつも手と頭を働かす癖がついていた。この癖が習慣となり、友人達は努力家などと呼んだが、傍観者にいわれるほど努力はしていなかった。一途に仕事を続けているように見えても、取捨選択もあり、執着あり、倦怠もあり、移り気の繰返しであって、時間のむだか、徒労もあったようだ。しかし未だに多方面に興味を注ぐ癖は癒らない。これが建築のデザインや施工その他の細目に役立っている。

年をとって、自分を俎上にのせ、人間の性格や性癖を吟味すれば複雑なものだとわかった。

この運動嫌いで、酒嫌いの鈍才の私が今日まで生存し生活してきたと思うと不思議でならない。つぎに疑問をもったのは「人生」とは何だということであった。これを結論していえば人生とは一片の「布きれ」だといいたい。一枚の布地という意味にとってほしい。

この正月の東京は例年になく寒い。明治中期に母が着た古衣の村山大島うむぎのちゃんちゃんこ（私はこの袖なし茶羽織風のものを陣羽織とよび、亡き妻につくらせたもの）を着て正月を迎えた。この布地は９０年来の古ぎれで、これを着れば母を背負って動いているような気がする。私の「布地人生論」はこれから生れた。絹絲であれ、職人の紺の半被にせよ、現代版のGパンのような丈夫な布地でも、摺り切れて廃残すれば捨てられる。命脈がつきたと似ている。しかし「布地」は布として使用されている間は人間社会の役に立つ日用品に過ぎない。過ぎないが、欠くことのできない必需品だ。人生を難しく考えることはない。一片の布切に過ぎない。

たいていの布切は、たて系（経とよぼう）とよこ糸（緯とよぼう）によって織りあげられている織方も多様ながら民族・時代によって相違はしていても、経緯の構成には変りはない。私は人間の意識・感覚・知覚・感情・記憶・想像・思考・判断・意志・能力・性格・性癖……など人間が各自もつ先天的の精神はたて系（経）とみたい。人間の個人々々によって太さや細さはあるだろうし、人によっては欠除されている人もあるだろう。

そこでよこ糸（緯）となるが、環境・制度・配偶者・慣習・生命力・職業・信仰など……という後天的のものを指したい。経緯の変化は直ちに布そのものの厚さや薄さに影響するようだろう。毛糸・木綿・絹糸・その他の化学繊維による糸の相違から布の表現は変わるであろう。手造りの織物のように、また機械織製品のように、ある特有の表現は暗示も与えているが、布として「完成」であり「平衡」を保っていることに留意されてほしい。

私のいう「布きれ人生観」はあくまでも比喩であることを断っておこう。

しかし、幼年時・少年時・青年時と回顧してみて、いろいろと関係した事を函館に限っても想出はつきない。函館人のもっているきかない気性は私にもある。平常は在るがままに流されてゆく宿命的の諦観のあるところは父の性格の遺伝かもしれない。布地にみたて、各人の面持や行動には経緯の差別のつかないで平衡を保っているから、人間という生物は不思議な生物である。

私などの経は、まあまあ普通のできであるが、緯の方は少しばかり普通人と違った緯があったようだ。それは「緊張の緯」と名づけている一本である。祖父は願乗寺を開削したり、伯父が地震計を発明したり、父は堀川小学校を開設した。祖父・伯父・父は私の親戚縁者に当る。私が年令を増す毎に、また文献や書類を調べてゆくごとに自らが緊張させられ、遺された行動や業蹟が明瞭になるに従って、緊張の度を増してゆくので、やゝ手に余る。

さらにひとつは「恩寵の緯」と名づけているが、親戚でもなく、あかの他人から特志的、奇蹟的の援護と恩寵を蒙ったことだ。人々はこれをスポンサーというが、好意以上の好意を示された例が多くあり、全く奇蹟というよりほかはない。「だから、甘えん坊」といわれるが、「甘え」は自己喪失を指す。別に甘えたれて自己を喪失するようなことはなかったが……。

さらに、これに似ているが「師恩の緯」だ。それは私が住吉小学校から新川小学校に転校した機に始り早稲田大学で「師」に恵れていたことであった（函館中学校や早稲田高等学院の在学中は尊敬した師はいたが、師恩の緯に入る師は覚えていない）。新川小学校では函館でよく知られている神山茂先生であった。小学校と中学校時代は直接にも間接にも教示と教育を私に賜り、死の直前まで、あれこれと指導されたことは忘れ難い想出になって遺っている。先生の歿後の昭和４８年頃であったろう。図書館の田畑幸三郎氏にこの旨を話したらば「それはそうでしよう。神山先生の家は貴君の祖父堀川乗経さんの建てた清川村宣法庵の壇家総代でしたものね」といわれ唖然として驚き、この句は継げなかった。

私の生涯は建築設計家と教育家が大半で、大学在学中から建築設計を志向していた。建築の分野には構造あり、設備あり歴史あり加えて施工あり経済ありで、その複雑混迷さは想像以上で、設計ということは絵そらでないことは大学一年生時に理解した。滑稽事ながら大学在籍中はこの凡児は無欠席で通さざるを得なかった。実習を欠かしたのは昭和２年９月からであった。この時点に意表外の特志家が現れ、私に独立自営をすすめられ余儀なく就職せずに社会に出た。世間からこの冒険に満ちた行為を、無軌道と判断されても致方あるまい。

トネミルンのアルバムには幾枚もこの基坂の真写がはりつけてあった。よほど想い出のところらしい。　―明治12年頃（1879）―

日本の大学の一般教員登用法は、成績のよいものを教授が選び、それを研究室で育てて次代に教授の席を与えるのが通例らしい。仮りに「エリート教員採用方法」と私は名づけている。私なぞはエリートになるなど考えたことはなかった。どちらかといえは成績を気にしない癖があり、未だに卒業時の自分の成績を知らない。在学中は自己にプラスするものえの吸収に余念がなく、幸い留年せずに卒業できた。しかし卒業後の自営中、建築について理解のできないもろもろ点が材料や構造や住宅平面についてあり、休日を利しては担当された先生達の戸を叩いて質疑した。先生達の研究室に再び入ろうなぞの気はさらさら無く、その頃既に建築社会面の苦渋を知っていたからだろうが、実務面で逆に諸先生から質問をうけ、こちらが答える場面も多かった。何れの点が気に召されたのか、故吉田享二博士、故内藤多仲博士、故今和二郎教授の推薦で教職につくようにすすめられたのは、ちようど函館の棒ニ森屋一期工事（大門前）の終了時の昭和１３年（１９３９）の頃か。その頃は故大谷光端貌下から新京別院の試問をお答えしたり、また故大谷尊由貌下の御指示で日鉄関係のコールバンカーの設計の依頼をうけて繁忙そのものであった。それで推薦の諸先生方には「少し考えさせて下さい」と足ぶみした。伯母トネ・ミルンや実兄の堀川乗道（当時・函館商業学校教諭）からの話しで伯父の故ジョン・ミルン博士の箴言めいた言葉をきき、「教育」には一抹の不安を挾みながらも魅力は感じていたのは事実であった。また卒業後の質疑訪問中に個人的にいわれた諸先生の言葉のなかに忘れられぬ名言があり、ミルンの言葉など、これらすべてを「箴言の緯」と私はよんでいる。ミルンの事については函館の人々は新聞でよく知られ、森本貞子著「女の海溝」文芸春秋社発行・西島照男著「遠い人近い人」日本随筆家協会発行の諸著作によって多く知られているから贅言は要しない。ここに梅村魁博士の文があり、掲載させて載く――前略・私は日本の耐

ジョン・ミルン博士の工部大学校時代
―明治18年（１８８５）―

震構造の将来について考える一助として耐震構造の歴史を勉強しているうちに自然にその周辺の技術に関する資料を眺めるようになった。日本の地震はＪ．ミルンによって始められたといってよい。氏はキングスカレッジ及王立鉱山学校に学び１８７６年工部省の工学部大学に教師として招聘され年令２６才であったが、故国で既に有名であった。当時日本では工業の学たる工学に関する学校が１８７３年にH．Dyerを学長とする９人の英人教師によって開設されていて、これが１８７７年工部大学校になり、１８８６年に東京工科大学につながるのである。ミルンは来日に当りシベリヤを経由し蒙古・上海を経由して東京に着き、日本の地震に遭い、これが地震研究の端緒になったのである。氏はその後日本女性を妻とし、１８９５年帰国されるまで日本地震学会（１８８０年創立）幹事長。1989年創立の震災予防調査会嘱託として活躍された。今から百年前後まえには多くの外人教師が来日し、我国の近代化に貢献しているが、１０年間位で、日本独自の教師が生れていて、その独立性の早さには驚くのである。

例えば先述の震災予防調査会委員はミルンだけが外人で、菊地大麓・古谷公威・辰野金吾・田中館愛橘・長岡半太郎・大森房吉などが見えている（下略）。（註――東大工学部ニュース８７号・工学部ニュース委員会報７７０６０１参照）

トネ・ミルンはジョンミルと霊南坂教会で結婚式をあげた、当時の記念のもの
―明治14年（1881）―

実兄の堀川乗道は仏教大学（現在の龍谷大学）を卒業後、浄土真宗本派本願寺より「英国に在る印度哲学研究及び青年と女子の社会奉仕制度研究を命ぜられ１９１２年から２年間ミルン夫妻のところに仮寓した。ミルンは実兄に対し、英文の「読み方・話し方・書き方」を家庭教師までつけて学習せしめ、その折々に学究についての箴言めいたことを話した。その時の箴言が伯母トネ・ミルンと実兄から私に伝えられたのであった。「大学教育というものは格式か形式のものが概して多い。学究は自ら探究するもので、師に余り頼らぬ方が良く、時間と費用は惜しむな。もし発明とか発見を志すならば、自分の財産を摺りつぶしてもやる覚悟が要る……」と。私は年が過ぎるとともに、この意味を解し「箴言の緯」の一本にしている。私は英国ワイト島のミルンの墓前に詣り花を捧げたのは昭和40年（１９６５年）の７月１２日であった。ミルン夫妻の住んでいた飾気のない佗しい王立地震研究所跡をみた。

ミルンはよくゴルフを楽しんでいたと伝えられていた。おそらく、あの草原がミルン・ヒルかなどと憶い出しながらシャイド停車場に急いだ。その鉄道も１９６６年には廃止されてバスに変るとか。時過ぎ星移りと変るものは変るが、変らぬものは「ミルンの箴言」である。

ワイト島の地震研究室では、いつもトネ・ミルンは編ものをして、夫の研究を見まっていた。
―明治40年（1907年頃）広田忍氏撮影―

開祖法然びいき

～称名寺を見学して～

会員　境　千枝子

先人達がどの様に自然に働きかけ、生を営み、その風土の中から文化を育み足跡を刻んで行ったのでしょうか。郷土史研究家としても著名な、称名寺住職須藤隆仙師のユーモアー溢れる講話は、函館に生まれ育った者にとっても新鮮で興味深いものばかりでした。特に阿彌文化を盛り込んだ板碑と、円空上人作の観音像に強烈なパンチを受けました。9月18日恩師である網代先生より「弟さんのお墓参りも兼ねて称名寺の見学に行きましょうよ」とのお誘いを受け、〝れきふう会〟の行事に初参加と相成りました。

＝板碑と観音像＝

お庭に下りて「北海道最古の金古文」貞治の碑から見学が始まりました。室町鎌倉期に本州で盛んに見られたものが、どの様な経路を辿ってこのエゾ地大町から発掘されたのでしょうか。北前船の往来が盛んであり、又天然の良港に恵まれた此の港街は、幾多の人びとを呼び寄せ様ざまの文化を吸収し根付かせたものの様でした。

浄土信仰を二様の絵にあらわした此の石の供養塔婆は板碑と呼ばれ、生活に密着した質の高い文化を今日に伝えています。阿彌陀如来を礼拝している若い男女の絵と、阿彌陀如来来迎図とが陰刻されてあり。去り逝く者が無限の優しさに包まれて彌陀に委ねられる姿に感動します。本当の意味の文化を享受していたのは此の人達ではないでしょうか。素朴な気持を自分の手で見事に表現し主張しています。

此のお庭に芭蕉の汐干塚を見たのも意外でしたし、玩具の様な十三重の塔も心なごむものでした。

大広間に戻り円空上人作の観音像に対面し、その荒削りで背後が扁平な姿に何年か前の嵐のキャンプ地「熊石」を思い起しました。台風一過嘘の様な朝を散策した時、何も無い原っぱで「円空何とかの地」と書かれた白い標柱を見つけたのです。今眼前に御座す観音像には、夜通し吼えたあの海こそ相応しいのです。その彫られた風土を背負っていなければならないのです。優しい慈母の眼差しではなく、眼光鋭く暖衣飽食時を貧っている事を、逆巻く白波の中から見据えている巌父そのものなのです。その激しさ由、一個人の家の安逸に納り切れず、衆生の済度を願い、放浪を経て、称名寺という処を得たのでしょう。

＝葵のご紋の浄土宗＝

極楽浄土の荘厳をなしている本堂も過去何度かの火災に見舞われ、昭和4年に現在地船見町に燃えない鉄筋コンクリートで再建されたものです。その砌、大本山増上寺より贈られた人天蓋は特に立派なものです。「日光の東照宮へ行った事がない人でも此の細工や色彩をイメージすれば大体間違いなく結構が語れる」そうですし、浄土宗は唯一徳川家と同じ葵のご紋を許されているそうです。桃山藤原時代の見事な仏像に溜息をつきつつも、手や足が修理されている為、道や国の文化財としての指定が受られないと云う事への痛ましさと、ここ迄守り通した労苦にしばし合掌…。

幼ない頃の称名寺でのイメージが音楽に生きているという広瀬量平氏。須彌壇の両側を飾っている大壁画を描いた岩船修三氏など、現在活躍中の縁の人々の話も尽きません。

＝海の見えるコミュニテイ広場＝

外え出て本堂の扁額「護念山」を仰ぐ。こんなにも青い空。暖かい日差し。カメラを手にした若者達のトーンの違ったさざめき合い等。30年余ここへ通っていて初めて見た光景の様な気がします。朝の連続ドラマのタイトルを飾ったという大銀杏の元へ落ちる木漏れ日を数える様に踏み乍ら、今日の函館を築き上げた人々の眠る墓地へと歩を進めます。　大空に羽ばたく絶調の時、不条理を引き受けて散った高田屋嘉兵衛を始め、此処彼処からの問いかけや語りかけは、海に依って拓かれたこの街なればこその多様な生き様を皮膚に感じて痛い程でした。私はお墓というものに限りない先人の慈悲の心を感じます。自分が喰われた痛みから、自分の喰ったものの大きさを知り思わず合掌します。どんなに険しい道でも誰かが通った跡があり、心の最果ては見る事ができません。十一面観音を安置している観音堂をしんがりに記念撮影をして散会しました。

＝知り・語り・伝える＝

函館は大火が多くその都度失なった人、物の損害は膨大な数にのぼり、函館人の諦めの良さもその事と無縁ではない様です。風土や歴史は人間が造り積み上げて行くもののその風土が人間を育むという人間と風土の生態系を壊さない様に守って行く、つまりは人間を守って行くというのが、「守る会」の大きな柱と感じ取りました。黙々と生きた人々の心を垣間見る事もでき、その託された心を受け取り、語り伝えて行く懸橋としての文化財をも再認識しました。

又一つ心を鎮めるものに出合えた事に感謝しつつ筆を置きます。

小樽運河運動の意味するもの

～1983年の総括にかえて～

昨年も各地で多彩な町並み運動が展開された。　大きな山場や転換点をむかえた運動もあれば、平隠な1年をすごした団体もある。町づくりという息の長い作業を進める町並み運動であってみれば山あり谷ありは自然な姿といえる。

そんな中で小樽運河を守る運動は今年で10年、たえざる緊張のもと質の高い密度の濃い運動を持続してきた。「ポートフェスティバル」「小樽運河研究講座」「タウンオリエンテーリング」「紙芝居」「ロフト基金」等々、次々とうち出された試みはとても北国の斜陽都市小樽から聞こえてきたとは思えない新鮮で都会的な響きを印象づけてきた。

とくに小樽で開かれた第3回町並みゼミ以降、その熱心な取り組みと困難な闘いをみた全国の人々にとって、小樽はたえず心にかかる存在となった。いわば町並み運動のひとつの原点となったのである。

昨年11月12日、全国に報道された小樽運河杭打ち工事開始のニュースは、私たちの気がかりを改めてかきたてることになった。地元の報道がいかに沸き返っても、それらが全国各地まで伝えられることは稀である。情報の不足にいらだち、何かできることはないかともどかしく思った人々は多いに違いない。

揺れ動いた8月以降

6月の臼杵ゼミ以降の主な動きはこうだ。8月6日小樽商工会議所川合会頭ら首脳部が運河埋立て計画見直しの意見を表明した。「隠れ保存派」の表面化である。市長はこの意見を不可解として退けた。その後、玉虫色の「統一見解」、会頭らの重ねての保存発言に副会頭の1人が辞表を提出など、商工会議所の動きはひとつの焦点となった。

一方9月12日、保存運動をすすめる母体として広範な市民よりなる小樽100人委員会が結成された。「小樽運河を守る会」は裏方にまわり、工事中止を求める10万人署名運動が開始した。9月26日、注目の横路北海道知事は「地元のコンセンサスが出来ない限り、現在の行政手続きを進める」と発言。10月26日には入札、工事の準備は着々とすすめられた。

この間署名は予想を上回る反響をよんだ。工事開始前の11月11日には10万人へあとひと息の9万4千人の署名が集まり、100人委員会はそれをもって市と道に工事中止を申し入れた。9万4千人は小樽人口17万9千人の525％にあたる。しかし翌11月12日、多勢の市民の見守るなか予定どおり杭打ち工事開始、以後は1日4～5本の「順調」なペースで今日に至る。

小樽運河を守る運動の意味するもの

ニュースの詳細はさておき、考えてみたいのは小樽運河を守る運動の町並み運動における運動論的な意味についてである。

まず確認すべきはこの運動が、法形式上は完璧な公共事業の変更を求める、行政の壁への挑戦だということである。この壁はたとえ強行採決に拠るものであっても法律上はいかんともなし難い。これをのり越える説得力のある論理は計画の実質的意味を問うことによるのが基本であろう。「守る会」は代替ルートの可能性を示すだけではなく、道路の必要性そのものに疑問を向けはじめた。急ピッチにすすむ山側回り道路の整備や小樽市の人口停滞が6車線という大型臨港道路建設の意味を失わせつつあるという主張である。そして自ら交通量調査を行いこのことを裏づけた。

法律的な手続きを踏んで一度事業決定されたものの変更は多くの町並み運動が直面している最も困難な問題のひとつである。小樽は「近代化」の論理、形式民主主義、唯我独尊的技術体系と町並みの思想とが対決する最前線に立っているといえよう。他の多くの運動から熱い視線を浴びざるをえないひとつの理由がここにある。

第2に着目したいのが経済的リアリティのもつ説得力である。当初の文化運動のレベルでは運河保存が経済発展に不可欠だという予感と確信はあっても、現実性であと一歩の感をまぬがれえなかった。小樽の場合、西武堤代表の発言、相次ぐ倉庫再利用の成功、外国でのめざましい成功例などがこの限界をとり払っていった。こうして商工会議所会頭の発言が生まれ、仮に迂回路を建設しても余分な費用は運河保存による経済効果で回収可能という考え方が実感として市民に受け入れられていった。

第3にそして最も重要なのが運動のあり方に関してである。分裂や理念との乖離を避け、着実に広範な共感を受けるに至った基本に、若者に開かれた活躍の場、調査に基づいた科学的な論理の積みあげ、環境学習型イベント……といった小樽運動の運動としての理念をみるのである。加えて守る会会長峰山さんの「相手を殺さず相手を生かして」という考え方に注目したい。これは、人間関係の基本を守る高い理念となっているばかりか、地域社会の中で幅広い共感を得ていく現実的な路線であるといえよう。峰山さんの感情を揺さぶるような外見の中にこのような冷静さが潜んでいることは見おとされがちである。そしてここから「町づくりは勝った負けたではあるまい」という大きな度量が生まれている。

運河埋立てをめぐる今後の客観状勢は大変にきびしい。にもかかわらず正々堂々と運動の道を開いている小樽運河を守る運動に私たちは支援を惜しまない。と同時にその経過をじっくり見据えていきたいと思う。それは私たち町並み運動全体のために次々と書きおろされている教科書でもあるからである。（全国町並みかわら版より）

事務局だより

★10月9日、在研究所長　佐藤優氏（前盛岡市市民生活部長）をお招きし〝手づくりの盛岡〟と題する講演会を㈳北海道建築士会函館支部と共催で開きました。後援してくださった、市教委・道新・ＮＨＫ・㈳北海道建築設計監理協会函館支部その他の諸団体に感謝の意を表します。
会場がユニオン・スクェアでしたが遠方より多数の参加者もあり美しいスライドと熱の入った佐藤氏の語りくちにひきこまれ、もち時間がアッッと言う間にすぎてしまいました。みのり多い講演会でした。
★１月25日、恒例の第６回函館の町並みを美しくするチャリティパーティを国際ホテルで催しました。多くの方々の御賛同によって約３００人の方々、和やかで楽しいひとときを持つことができました。物心両面にわたって支えてくださった赤光社・建築雑考の会・函館市・各企業ならびに当日ご出席の皆様に改めて御礼申しあげます。
★２月４日、学習会をＮＨＫ集会室でしました。講師佐々木正明氏（函館北高教諭）が「市街地の拡大と水ー上水道のできるまで」、講師宗像英雄氏（函館植物研究会々長）のテーマは「函館にゆかりの２人の学者ーブラキストンとマキシモヴイッチ」です。夫々ご専門の立場から極めて興味深いお話をきゝ大いに学習を深めることができました。詳細は次回の会報でお知らせします。
★当会の運営、企画等に対し会員の皆様には種々ご意見とうがあろうかと思います。何卒事務局までお寄せ下さいます様、なお行事、催事にご参加下さいます様望んで止みません。
★会の運営は皆様の支えによって賄われています。会費未納の方よろしくご協力お願いします。振込先（拓銀昭和通支店㊐298－40)又は（郵便局　函館６３０）宛先は何れも函館の歴史的風土を守る会　佐々木正子　です。

＝全国町並み保存連盟のご紹介と全国町並みゼミご案内＝

もっと早く会員の皆様にお知らせしなければならない情報でした。おそくなりお許し下さい。実は我らの歴風会や小樽運河を守る会等北は小樽より本州、四国、九州、沖縄にある歴史的町並みの保存、再生をめざす各地の住民運動の連合体が「全国町並み保存連盟」です。加盟団体は現在39団体で本部事務局は木曽の「妻籠を愛する会」と東京事務局とがあります。1974年に結成され1978年から毎年「町並みゼミ」を開催・その成果は多方面から高い評価を得ています。第３回ゼミは小樽と函館で開かれました。
第７回町並ゼミは５月26～28日飯田市と大平宿で開かれます。大平宿は過疎化の波の中で一村全員が離村した地ですが大平宿を残す会、大平宿を語る会の愛情と努力、ご苦労により再生した宿場です。ゼミは多分宿場の囲炉裏をかこんでの話し合いになるでしょう。参加は自由です。事務局は下記の分科会でのレポーターを募っています。どなたでも応募できます。希望者は歴風会事務局又は田尻まで。
＝第１分科会　民家の改造と修景計画＝伝統民家の増改築修復の成功例　失敗例　電柱撤去　看板統一などの実施例
＝第２分科会　産業振興と町並み保存＝町並み地区のマンションなど巨大建造物出現対策　町並み地区と都市計画道路
＝第３分科会　自然保護と町並み問題＝水辺の町並みの特殊性　町並みと緑の関連　ナショナルトラスト運動
＝第４分科会　過疎の町並み問題＝出稼ぎや過疎化のため活動家不足問題　離村　離島など実例検討
＝第５分科会　これからの保存運動＝学習やイベントのあり方　行政との関係　点在する歴史遺産の保存
皆さん、時間とお金をたくわえ是非ご参加下さいます様大平宿の近くに妻籠宿もあり帰途に明治村見学などいかがでしょう。

編集後記

♣昨年12月、当会運営委員及び内外の協力者により町並みパーティ実行委員会が組れた。会場はユニオン・スクェアを合い言葉に何度か会を重ねパーティ券が刷り上った直後、ユニオン・スクェア倒産の衛撃的なニュースでした。
その後本番まで、会場変更、企画見直し等身の細る思いで一同頑張りました。木下実行委員長、吉田和子副委員長他委員の方々に会報を通じて、ご苦労の数々に感謝の意を表します。
♣町並み保存再生の象徴的存在であったユニオン・スクェアの破綻は多くの市民運動に様々の影響を与えたのは事実としても、善意と理想に燃えての出発であったにもかかわらず膨大な借財をかゝえて挫折された今当事者の嘆き口惜しさは筆舌に尽し難いものがあると思います。力強い再起を心より願っています。それにしましても草創のロマンを語るユニオン・スクェアの名前とあかりが同時に消え去るのは惜しまれてなりません。
♣全国町並みゼミで、よく町並み気狂い名物行政マンのお名前を耳にする。内子の岡田氏、妻籠のコバ氏、臼杵の斎藤氏etc、その横綱格が実は盛岡の佐藤氏でした。年来の望がかなえられ佐藤氏来函の運びと相成った次第です。講演終了後、期せずして多くの溜め息がもれた。ああ！盛岡と函館のちがいは、どこから…？その１つはどうも町並み気狂いの有無に関係がある様です。町並みの思想や具体的処方箋は衆知を集めてでもできますが、ヤル気と情熱は別の世界です。わが函館でも町並み問題が街づくりの一貫として行政側が着実な歩みを続けています。一層の期待を市民は寄せています。最後にご多忙のところ執筆下さいました方々に心より御礼申し上げます。
田尻